

グラウンドワーク三島・視察研修体験を終えて

早稲田大学創造理工学研究科建設工学専攻景観・デザイン研究室修士2年 緒方陸人

GW 三島の水辺再生の取り組みについて

今回訪れた中で最も印象的だったのは、境川・清住緑地だ。昨年の夏も訪れた場所だったが、当時はこれが本物の湧水だということ、市民参加によって整備され、現在も住民の手によって維持管理がなされているという事実を知らず、なんとなく自然があっという間、という印象だった。しかし、今回は美和さんのガイドのおかげで、県の遊水池計画を変更して市民参加で計画した空間であること、三島市と清水町の管理境界や平成建設の社長の宅地立地によりいまだに実現していない部分までであること、コロナ禍を経て活動が減り水田が維持できなくなったことなど、現在の課題まで詳しく知ることができた。

GW 三島による水辺再生の取り組みでとても印象的だったのは、「自分たちで先に絵を描いてしまう」ということだ。境川・清住緑地だけでなく現在進行中の松毛川も、行政や個人、誰の所有かに関わらず、先に全体像を描くことで、多様なステークホルダーで将来像が共有できる。都市デザインの分野でも、「デザインノート」や「ランドデザイン」など様々な手法が検討されているが、GW三島では平成初期から導入していたことを知り、渡辺さんの先見の明を感じた。一つ心残りなのは、前回も含めて下流の温水地までは行けず、都市と農地をつなぐ源兵衛川の全貌を把握できていない点だ。次回は源兵衛川の下流部を含め、まだ見ることができていないGW三島の活動場所も訪れてみたい。

今回の体験について

今回、大場での草刈りと松毛川での植樹をほんの少し体験し、「自然とつきあうということはどういうことか」を考えるきっかけとなった。普段、授業などで「緑」「水」「生態系」などをコンセプトとしたデザイン提案を気軽にしてしまうが、それを維持管理するのは誰なのか、どれくらいの手入れが必要なのか、まではあまり意識を向けられていないことに気づかされた。デザイナーは空間をデザインしただけで終わりではないし、だからといってメンテナンスフリーなものがいいわけでもない。維持管理活動を通じて生まれる住民どうしのコミュニティや、活動を通して生まれる地域全体ひいては地球全体への意識など、活動を通じて得られるものは大きなものがある。今回体験したのはまだ4月の暖かい気候で作業も苦ではなかったが、草が生い茂る夏の暑い時期の作業は想像しただけでも大変だ。維持管理で生まれるコミュニティ、というようなきれいごとばかりを言う前に、まずはデザイナーも体験しその大変さを知ることが必要であり、その経験をデザインに反映していくべきだ。とても印象的だったのは、美和さんやスタッフの方々が揃って、「こういった活動が好きだ」という純粋なモチベーションのもと活動が続いている、という点だ。GW三島が多くの体験を受け入れているのは、身近な自然環境はこうした維持管理活動に支えられていることを学び、一人でも多くの人が活動に共感するために非常に重要だと感じた。

全体を通して得た知見

私が最も印象に残っているのは、グラウンドワークという活動の意義だ。英国で生まれたグラウンドワークは、必ずしも環境活動だけではなく地域のコミュニティ再生などの幅広い活動を包括しており、大学生などがダウンタウンやスラムに入って社会貢献をすることで「人の心を変える」活動であること、「ま

ちづくり」の原点は「人づくり」であるという理念のもと行われている活動であることを知った。それも、ケンブリッジ大やオックスフォード大といったいわゆるエリート大学で単位として認定されているという点が非常に先進的だ。日本の大学でも、インターンやボランティアが単位に含まれることはあるが、私自身身近にそれで単位を取得している人を見かけたことはない。英国では大学生で社会貢献を通じた人間が国家を運営し手厚い社会保障へとつながる、という好循環のしくみが存在し、日本では「社会の闇」に触れずに生きてきた人が上に立ち、社会問題の解決にはつながらず、という悪循環に陥っているのではないだろうか。

また、渡辺さんのお話の中で「魂を売る」「死んだふり」といった強い言葉が出てきたこともあり、グラウンドワークの活動はまさに生き方に直結するものだと感じた。その一方で、決してその生き方を周囲の人に押し付けていない点も印象的だった。いろんな生き方がある中でどんな道を選択するかは結局自分次第だが、その選択がそこに暮らす人々や社会にどんな影響を与えているのか、社会で働く中でも忘れないでいたい。